

以前から脚本家として活躍されていますが、監督作は今回が初めてですね。ハリウッドの商業的な作品を選ばずに、あえて困難な本作を選んだ理由を聞かせてください。

ハリウッドで繰り返し同じような作品に関わることは避けたかったし、こういうテーマに興味を持つ下地はあった。アメリカがイラク戦争に関わった頃、僕は17歳で、学校の教師は僕らに心の準備をしておけと言った。戦争が長引いたら、招集される可能性もあるからと。幸いそんなことは起こらなかったが、可能性はあった。当時、僕は初めてイラクの状態を知った。それまでは他の国の戦争のことなんか考えたこともなかった。あれから30年近く経つけれど、あの時から下地は育っていたような気がする。だから今回、この話が来た時、やらないなんてことは考えられなかった。できる限り多くのイラクの人にとって、リサーチをしたいと思ったが、非常に困難だった。僕らはイラクに知り合いなんていなかったからね。それに本作の最初のきっかけとなった、「ザ・ニューヨーカー」誌に掲載された記事を書いたジャーナリストや、SWAT部隊の人々はイラク国外に出られなかった。だから僕らは世界中を探し回って、状況を詳しく知っている人を探した。僕のような白人が、できる限りリアルに物事を描きたいと本気で思っていることを知って欲しかった。どんなユニフォームで、人々は毎日どんな騒音を聞き、どんな気持ちで過ごしているのか、できるだけディテールについて知りたかった。記事を読んで、僕のように感じる人ももちろんいると思うけれど、アメリカ市民の大半はイラクにいい印象を持っていない。でも、中にはSWAT部隊のような人々もいる。だからこの映画を作る上で、僕らにはこの話を皆に知ってもらふ責任があると思った。

10年以上にわたってイラクで起こったことに関して、アメリカは責任があると思いますか？

(ため息) 世界は良くなったと言えたらいいけれど……この戦争が何かをもたらしたとは言い難い。本作のスク립ト・アドバイザーの父親は、1980年代にサダム・フセインを殺す計画を立てたグループの一員だった。でも家族がいたために計画は中止になって、そのことが後からばれたために、彼女と母親は国外に逃亡せざるを得なかった。1991年(国連による多

国籍軍がイラクを空爆した年)に何が起こったか、詳しくはわからない。でももちろん、アメリカの一部には責任がある。安全をもたらすためにアメリカ軍が駐屯をしているという見方はあるけれど、実際それが将来的にどんな方向に彼らを導くのかは、わからないままだ。イラクに住んでいる人々が民主主義についてどう思っているのかは、本当はわからない。200年かそこの歴史しかない国が、もっと長い歴史のある国に文明化を指導するというのはどうなのかということだと思う。ともかく、こういう作品が人々の興味を引くことで開眼させ、対話をもたらす機会になることを願うよ。

ルizzo兄弟は、どのような経緯で本作に関わることになったのでしょうか？

彼らも「ザ・ニューヨーカー」誌の記事を読んで、僕が興味を持っていることを知ったそうだ。それまで彼らに会ったことはなかったけれど、向こうからコンタクトがあり、脚本を書いて映画化しないかと勧められた。

ルizzo兄弟がプロデューサーについて、資金も十分に集まったのでしょうか？

その通りだ。通常だったら気掛かりな金銭的問題は、一切心配する必要はなかった。僕がストーリーや俳優との仕事に集中できるように取り計らってくれた。それが君の仕事だと言って。最初の監督作でこんないい環境を得られるなんて、他の監督たちに嫉妬されそうだし(笑)。映画を観てもらえればわかると思うけれど、そういう状況は映像にも表れている。撮影はモロッコで行われたが、本当にイラクに見えるように、皆が必死に頑張ってくれた。これはお世辞じゃない。モハメド(アルダラジー:プロデューサー)たちが全部可能にしてくれた。彼らは他のプロジェクトを抱えながら、日に18時間ぐらい働いていたのではないかな。

イラク戦争を描いた映画は少なくないですが、あなたが考える独自のヴィジョンとは何でしたか？

僕にとって最も大事だったのは、この戦争を彼らの視点から描くことだ。SWAT部隊や、そこに合流した若い警官が何

を見るか、西洋やアメリカ人の視点ではなく彼らのそれを想像することだった。彼らにとっては、自分が生まれて育った地域の戦いだ。それをいかに物語として構築していくかが、僕の課題だった。たとえば一つエピソードをあげると、イラク人のアドバイザーから彼のいとこがジハディスト・グループとの戦いに巻き込まれたと聞いて、この戦争は最も醜く混沌とした市民戦争だと感じ、そのカオスを映画で見せたいと思った。観客をその中に放り込んで、カオスを感じさせるんだ。中東戦争映画としても、これはユニークだと思うよ。この映画ができるだけ真実を伝えていることを願っている。

本作に込めたメッセージはありますか？

観客に伝えたいことは、我々は宗教や言語が違っても、皆自分たちの家族や愛する者が平和で健康的に生きられることを望んでいるということだ。それは、イラクの人々も僕らも変わらない。これまでは、彼らのことなど知らなかったかもしれないが、今自分が生きているこの世界に彼らも存在するんだということに気づいて欲しい。

オープニング・シーンは、モスルの街の光景ですよ？

モスルが解放されたすぐ後に、ドローンを使って撮影し、スモークだけは後から付け足した。カメラが廃墟からダウンタウンへと移動すると、車が渋滞しているのが見える。市民が生活を取り戻した証拠だ。その他は、モロッコで撮影した。

どんな監督から影響を受けていますか？

僕が脚本を担当した『キングダム 見えざる敵』をプロデュースしたマイケル・マンのことは非常に尊敬しているし、大きな影響を受けている。彼はいつも僕をサポートしてくれて、なぜかわからないけれど、とても気に入られている印象がある(笑)。ピーター・バーグ監督(『キングダム 見えざる敵』)も、僕と兄のジョー(『NARC ナーク』監督)を目にかけているね。彼らのおかげで、今日僕がここにいると言ってもいいくらいだ。ピーターとは、『キングダム〜』に続いて今回が2回目のコラボレーションだった。他にもマーク・フォスターや、ロバート・レッドフォード、そしてルizzo兄弟など多くの人からイ

ンスパイアされている。

なぜ監督をしたいと思うようになったのですか？

その欲求は自然に生まれた。この業界で脚本家として仕事をしていれば、この企画は自分で監督したいと思うものが出てくるだろう。僕の場合、それが『モスル〜あるSWAT部隊の戦い〜』だった。とにかくテーマに惹かれたんだ。

また監督をしたいと思えますか？

もちろん。デトロイトで生まれた貧しいアイリッシュ系移民の子供が、ここまでくのに20年近くかかった。今回こんな素晴らしい監督体験ができて、本当にいろいろなことを学んだ。興味が湧くテーマがあったら、是非また監督したいね。

続編を作る可能性はないですか？

それはないね。ほぼ2年の狂乱の時間を体験して、素晴らしいクルーたちとやるべきことをやったという達成感がある。もちろん将来どうなるかはわからないけれど、今は充足感でいっぱいだ。



マシュー・マイケル・カーナハン  
(監督／脚本)

アメリカ、ミシガン州、デトロイト生まれ。南カリフォルニア大学(USC)で政治学の学位を取得し、サンフランシスコの弁護士事務所勤務を始める。その後、ワシントンDCのシンクタンクに5年間勤める。映画監督として活躍する兄のジョー・カーナハンから脚本を書くように説得され、ピーター・バーグ監督の『キングダム／見えざる敵』(07)を執筆。続いて、ロバート・レッドフォード監督の『大いなる陰謀』(07)を手掛ける高評価される。その他の作品は、『消されたヘッドライン』(09)、大ヒット作『ワールド・ウォー Z』(13)、『バーニング・オーシャン』(16)、『21ブリッジ』(19)など。本作で監督デビューを果たす。